

氣を治し、社會的に重要な地位を占め、大いに勢力を振張せしことは想像するに難からず、巫が祈禱を爲し病を治し信徒の間に威力を振ひたると同一なり、要するに巫に二種あり男巫と女巫なり而して後者を普通とし前者は稀有なりとす、現今男巫の存在地は咸鏡南道より北青に到る間に於て殊に吉州を其の中心とす、前者は祭文を有し讀みて師より弟子に傳へ、後者は之を有せずして口より口へ傳へ其の下階級に至りては更に口傳への方法すら無くして、只錢を以て吉凶を卜ひ、失明者其の任に當る、而して前者は遂に道教の影響を受け著しく發達するに至り兩者相競争するの状態を現出せり。現今京城方面に於ては既に前者の勢力は後者の其れを凌駕しつゝあり。

朝鮮語に於ける舞党(무당)は巫の意義にして Mutang: Troihhehanski; bugefo; 等と同意義なり、即ち西伯利、滿洲、蒙古、土耳其語に共通し、ウラル海方面及中央亞細亞一帶の地方に巫の存在するを知るべし、巫の一種にファミリシヤマンなるもの有り、妻女其の職に就き、一家擧て其れる業となすに至り、茲に専門の巫を生せり、専門の巫となれざる所はスタノポイ山脈の東部に於て其の他の滿洲、西伯利、中央亞細亞、朝鮮は何れも之が専門家が存在を見る、世襲的の巫は其の資格を母より受け娘に傳へ、娘無き時は他の子女に傳ふ、然らざる者は神靈に感じたる場合之が資格を得、而して巫は結婚することを得、其の配偶者も亦他の職業に従事することを得たり。

往昔の風俗習慣として信仰を求めんと欲する者は必ずや鏡を必要とせり、蒙古、西藏の巫即喇嘛何れ

も皆然り、當時の思想にては鏡は崇高神祕を現はすものとせられたり、一人の舞党に對し二人の附屬巫有り其の一人は太鼓を他の一人は銅羅又は鏡鉢を叩くを常とす、患者を療さんとする時は病人の側面に祭段を設け供物を備へ祈禱を爲す、其の形式恰も我が平安及奈良朝時代の神樂に似たり、又當時に於ける我が佛教の舞に似たる所有り、又手拍子、歌、太鼓に合せて舞ふ所の我が國の踊に似たり、巫の袖無の長き胴著を附けたる様頭に長き麻の冠を附したる様は、恰も我が白妙の衣を着ける猿樂の三番叟を見るが如し、鈴は小なる鏡を伴ひ附し威力を有し、神妙雄大なる音響を發し、魔力に對抗することを得るが故に悪魔を驅逐するの用を爲すものとせられたり、我が日本の神樂にも尙鈴を用ゆ、共に相一致す、古代病氣に對する朝鮮民族の觀念は甚だ面白きもの有り、神は人間と悪魔との中間に有りと雖も悪き靈若し人間の腹中に入らば、祈禱して之を放逐するに非ずんば病癒ることなしとし、生活的障害缺陷の生ぜし事を知らずして全く悪魔の仕業なりと觀察したり、勿論當時は醫業の發達無く藥用療法を知らず、徒らに全快の時迄何日となく晝夜兼帯以て祈禱に努めたり、爲めに其の全快迄何年間を費し一家の財産を悉く消費し盡して尙足らざりし例は實に擧て數ふ可からざる程に上れり、祈禱の時は巫は口に刀を銜へ、威力を示し悪魔の侵入を防ぎ争鬪を試み、麻に悪き靈を負はして追つ拂ふ、又餅に付けて放擲し、之が驅除法となせり。

朝鮮人の考へたる古代の神なるものは靈即ち Spirit にして所謂 Got なるものは多少相異なるが如し、我



が國の原始時代の神も矢張り Shaman にして God 非ざりしが如し、朝鮮人の考へたる神の中には善神と悪神とあり、洪水、惡疫、戰爭、五穀の實らざる、こと等は凡て惡神即ち惡き靈の仕業なりとせり、我が國に於ては古事記等の中に極めて神祕的に認められ得ることあり、森には森の神、竈には竈の神、煙突の神、其の他家屋、峠、山等各々神ありとせしなり、故に峠を越える時は峠の神に手向を爲して自己の平安を祈るを常とせり、古歌の中に「幣も取敢ず手向山……」等有るは皆前者と同一精神に出づ、杜は杜の神の居る所なればとの意よりしてか杜の字を書きてヤシロと讀ましむるものあり字典に之れ無し、朝鮮の或地方にては、幣束繩を張り神聖なる所なるが故に癩病患者出血者等の不淨者入る可からずの標と爲せり、又一家の入口に幣束を張り又は村の入口に之を張る、之等は何れも舞党に關係ある宗教上の儀式なり、幣束の左綯の處、其の材料が藁麻を使用せられたる處何れも我が日本の幣束に類し、田舎の村の入口に惡疾拂に幣束を張るの風習亦良く相似たり、兩者の間共通點有り日韓民族元之同一民族に非ざるかを教ふるに似たり、朝鮮の文化研究に二あり、一は現今の文化より推して、更に將來幾何の進歩有りやを研究することにして、他は現今の文化を築き上げたる古き昔の民族研究なり。

偕て朝鮮の文化はシャマン教の次に、佛教儒教道教の影響を受け、殊に其の文化に大なる光を與へたるは、印度文化を中心とせる佛教の傳來なりき、轉迷開悟の大精神は、シャマン教の迷信を打破せんとしたり、現今朝鮮の佛教は衰へ只だ七堂伽藍の壯觀を遺せりと雖も、其れが諸文明に貢獻したるは實に

相像するに餘り有りき、シャマン教の儀式は恰も迷信の如く取るに足らざるが如き觀無しとせず、然れども他方に於て朝鮮民族性を遺憾無く發表するものなれば、其の研究も亦興味津津たるもの有りとす。(内外評論第七卷特別號「巫を通じて觀たる内鮮共通の風俗」鳥居龍藏)



## 第六編 朝鮮の文化

### 一 朝鮮の徳教

#### (イ) 朝鮮の徳教

#### 佛教

○三韓時代に隆盛なりしが王室中心、上流域外に出でず。

○李朝は之を壓迫し、僧侶を社會外に驅逐す、僧は吉凶占筮、加持祈禱を以て愚夫愚婦の穀錢を得、或は寺院を都人士遊樂の待合所として席料に生活す。

従つて佛教は國民の徳性に對して何等の影響を與へず。

#### 儒教

上流中流に止まり、國民に及ばず。

王室、上流に行はれしも儀禮に止まり精神に突入せず、形式的禮儀に墮して心讀色讀せられず。

従つて國教の觀ありて而も國民徳育を陶冶するに至らざりき、即ち形式的儒教によりて、形式的徳性を馴致したりに過ぎず、故に人事百般皆形式に流れ、繁文褥禮の弊を生し何事も形式のみを尊むに至

り、總て其云ふ所は其心事に異り、是れが爲に同胞互に信義を欠き動もすれば互に相陷濟せむとし國人間の信用なるもの殆んど地を拂ふに至れり。

#### ○淫祠邪教

國民は安心立命の地なり、心不安なるが爲め、亂心怪力を信じ、或は酒色に耽溺し、一は迷信に、一は墮落に走る、斯くて巫女祈禱者跋扈し、彼等は王宮に迄侵入し、上は國王より下は最下級者迄巫女祈禱者を信するに至つた。

#### ○基督教

朝鮮人が基督教徒となるは、其宣教師本國の勢力を肩に被つて、自國政府の壓抑關涉を避け、治外法權的立場に居らんが爲なりき、宣教師も亦之を傳道の方便に利用し、其本國の勢力に藉りて極力基督教徒を保護したり、故に基督教徒が悪事を働くも教會内に潜伏すれば、時の政府は宣教師背後の勢力を恐れ、容易に之を捕縛する能はざりき。其他基督教徒名の故を以て多くの便宜を有したるが爲め、其固有思想が基督教の倫理と相合せざるにも拍らず、國政に不平の徒は相率きて基督教の間に入れるなり。大體より見て朝鮮徳教は形式的儒教、消極的儒教の傳説的感化力に在り。

即ち形式的道義の消極的存在なり。(京日大正十一、五、五)

#### (ロ) 表 旌 碑 閣



孝子閣	五	祠閣	一
烈女閣	四五	神道碑閣	一
璿源閣	二	崔致遠碑閣	一
御筆閣	一	朱子影閣	二
紀蹟碑閣	一	旌忠閣	二
碑閣	四	實錄閣	一
勝捷碑閣	一	忠烈閣	一
旌閭閣	三	忠孝閣	一
貞烈閣	二	四節閣	一
貞女閣	一二	表忠閣	一
塑像閣	一	瓢巖閣	一
旌閣	四	妥忠閣	一
三忠閣	一	合計	九七
雙節閣	一		

抑も朝鮮に於て建碑記實の事は新羅朝の時代に掬まると雖も同時代に於て經營せるものは今日に傳は

るもの甚だ稀なり、高麗の太祖王建は三綱行實を作り普く國內に頒布して忠孝烈の三事を奨め又事蹟の後世に傳ふべきものは之を三綱行實中に收むべきことを後嗣に遺訓したるを以て後嗣の王公廷臣等太祖の遺訓を體認格守して其の行實の三綱に該る者を誌録し以て傳贊に勉めたるより人々忠を勵し、孝を盡し節義を重んずるの風起れり、故に此の時代四百餘年間に建碑傳贊の舉、新羅時代に比して一層盛況を極め其の今日に傳はるもの多くは高麗の中期以後の建設に係る、李氏も之に倣ひたれば此建碑も重んぜられき。(月報明治四四、九月、本府社寺宗教)

### 二 朝鮮の習慣

#### (イ) 朝鮮の習慣

##### 一、善良なるもの

##### 1. 尊祖の習慣

イ 墓地を大切にすること。

ロ 祖先の祭をなすこと。

##### 2. 尊長の習慣

イ 長上室内に入り來れば、起立して敬禮し、其の席を讓ること。



- ロ、長者に遭ひたる時は途上の挨拶も叮嚀なること。
  - ハ、長上の前に喫煙、飲酒せざること。
  - ニ、長者に對して一般に従順なること。
3. 勞働の習慣
- イ、朝早起なること。
  - ロ、幼者が能く薪柴等の採取に従事すること。
  - ハ、幼者が能く牛車等を扱ふこと。
  - ニ、女兒にして能く物賣に歩くこと。
  - ホ、普通學校等の鮮人生徒が勞働を厭はず熱心に其作業に従事すること。
4. 鮮人生徒の國語堪能
5. 皮膚を露出せざること
6. 寒暑に堪ゆる習慣
- イ、寒暑激甚なる日にも、老幼の婦女が市場に魚介を鬻ぎ居ること。
  - ロ、寒中、幼少が薄著又は洗足にて平氣なること。
  - ハ、冬日婦女が堅氷を碎きつつ衣類の洗濯をなすこと。

ニ 災天にも傘、帽子等を用ひざること。

7. 雜習慣

- イ 飯の量の一定せること。
- ロ 女子の姿勢の正しきこと。
- ハ、齒牙の善良なること。

二、不良なるもの

1. 衛生思想の缺乏より起れる習慣
- イ 衣服に關しては脂垢にて著しく不潔になれる著物を着用すること。
  - ロ 食事に關するものにては、劣りに生水を飲むこと、弱年の時より喫煙すること、著物の裾にて食器を拭ふこと、井戸端にて洗濯すること、錢を口中に入ること。
  - ハ 住所に關するものにては、土足にて座敷に上ること、室の内外を餘り掃除せざること、便所の不備不潔なること、室内に唾を吐くこと、子供が室内にて放尿等をなせる時、其の始末の不充分なること。
  - ニ 便所に關するものにては、便所に往きて手を洗はざること。幼者の尿にて顔を洗ひ又は之を飲むものあること、便器を室内に置くこと。



ホ 起居に關するものには、朝顔を洗はぬものあること、食事の際小供まで跌坐又は立膝をなすこと、手鼻をなし其の手を著物にて拭ふこと、入浴せざるもの多きこと。

2. 公德心の缺乏より起る習慣。

イ 通路にあらざる他人の庭或は田畑等を随意に通過すること。

ロ 通路に大便をなすものあること。

ハ 牛馬の糞尿其の他の不潔物を處を擇ばず投棄すること。

ニ 自家の塵埃等を他家の垣下等に棄つるものあること。

ホ 樂書をすること。

ヘ 平氣にて他人の果物其の他を窃取すること。

ト 山に行き樹根の周圍の皮を剥き置き、枯死するを待ちて採り來ること。

チ 山野に往き劣りに稚樹を刈りて温突の燃料となすこと。

リ 泥酔して市中を慢歩すること。

3. 内地人に對する特異の行動

イ 内地人の構内に挨拶もなく入り來ること。

ロ 内地人が食事をなし居る際能く立見をなすこと。

ハ、内地人には物を高く賣ること。

ニ、内地人の小供に對して、或は惡戯を仕向け或は喧嘩を挑み或は通行を妨害し、或は子供の手持る物を強請すること。

4. 貯蓄心の缺乏

イ 貯蓄心乏しく、得たる金銭は直ちに徒費する習慣あること。

ロ 青年者が淫逸に流れ、飲食店等に入出入するもの多きこと。

5. 虚禮

人の死亡せる時或は葬式等の際に空泣をなすこと。(朝彙大、四、八)

(ロ) 早婚の原因

後繼者を早く得んが爲め、早く孫の顔を見て安心したき爲め、従つて子息の早熟を欲す。

早熟を促すが爲には食餌、服藥を奨めて之を強ふることあり。(主として上流家庭、入蔘鹿茸等の補氣藥)

最も經濟的にて效果あるは生熟せる異性を娶配することなり。

これ早婚には男(夫)少、女(婦)長の現象が伴ふ所以なり。(某)

(ハ) 朝鮮民族の祖先

印度ベンガル地方の家屋は悉く藁葺温突式で間取の如きも簡單に寢臺炊事場の二つに区分し、食器は



勿論男子の簪の如きも以前鮮人の用ゐて居たものに寸分違はぬのである、殊に言語發音の似通ひる點は全く驚くばかりで、壁一重隔て聞けば鮮人と違はぬやうである。又下著のズボンと裾で括る事並に他には見られざる白衣を用ひ、食物の共通、唐辛子を蔬菜に入れて煮る點等は全く鮮人の生活と異らぬのである、殊に驚くべきは後頭部の扁平なる點である、此の點は何れの地方に行くもベンガル人のみで斯くの如き熱帯地方に住みなから家屋の温突式なる事辛いものを好む點等は、どう見ても鮮人民族と共通の點があり、白衣の此地より發して比較的寒き朝鮮にまで及ぼした事が想像し得られたるのである。(間島新聞十二、六、八、釜山綠町藤田嘉吉氏談)

### 三 朝鮮の文教

#### (イ) 朝鮮の學問

朝鮮人は惟人の何たることのみを其學問とせり、即ち朝鮮人は朱熹の例に従ては心理を學び其他は一切孔子教の文章に従事せるのみ。故に書目の學も金石の學も、古錢の學も農耕の學も養蠶の學も工藝の術も殆ど何れも支那の豊富なるに對立する能はず。

朝鮮に於ては地理書は概して多からず、人民も士族も國內を轉住するは之を容易とするも朝鮮人は四周の有形的實物に對し趣味を有せず、好奇心缺乏し、觀察力を重視せず、草木禽獸や日常の物理現象は日常

慣習に依りて之を知れるのみ、其の關係を研究することはせず、「此は此の如し」と答ふるを以て常に十分なりとせり。

而して洪水や流行病其他此等の災害の時は、一地方に襲來するに當りては惡靈以外に他の原因あることを思はずして之を和げんことを惟憂ふるのみ。科學的思想の皆無なることは支那よりも甚し、何となれば支那にては時て奇怪笑ふべき論理を用ふと雖も觀測思想あるを證し數理の思想あるを見る。(朝鮮藝文誌クローラン)

#### (ロ) 朝鮮人思想根基の教化的分野

第一儒教 主として支那本の説明に従ふ、童學初讀、童蒙先習、擊蒙要訣、小學、禮記

倫理(道德) 三綱行實、五倫行實、孝行錄、孰孝錄、中庸九經衍義、大學講義、百行源、敦孝須知

進修楷範。女四書諺解、海東小學。

心理(理氣) 宇宙、人生、精神起原論に關し宋儒の學說を解説辨明す。

鄭道傳 三峰心氣理篇、

退 溪 四端七情、分理氣往復書、聖學十圖

鄭之雲 天命圖說

禮論(儀式) 「生活上の些細なる行爲を規律し、及び各地位に於て行ふべき適當なることを定むる



煩瑣なる紀綱」に於て、凡て身體の動作は精神に傳はるべし、動作を調和して以て其思想を整理するを得べしとなす。(クーラン)

朱子の著作を解釋し、説明す。

家禮考證。家禮附贅。家禮便覽。疑禮問解。五先生禮說分類。六禮疑輯。四禮訓蒙。四禮便覽、御禮合編

△朝鮮の哲學は既存の有力說に服従し且つ形式拘泥の網に拘束せられたること、西洋注釋學派スコラスチックの哲學と甚だ近似せり。(クーラン)

△孔子教は其道德的堅固なる爲め朝鮮に優越なる家族的理想を現出したり。(クーラン)

第二佛教 佛事問答、三門直指。天地八陽神呪經。五大真言。釋門家禮抄。佛家日用集。施食儀文。茶毗文。

第三道教 占星術。仙術。風水說。

方術 選擇要略。選擇紀要。增補天機大要。撮要新書。三聖訓經。感應篇圖說。敬信錄諺解。句解南華真經。

第四以上以外の信仰 宗教類似團體のそれ等。書堂に於ける教科書

千字文、童蒙先習、類合、啓蒙篇、小學、見學編、四書(殊に孟子)、詩傳、書傳、周易、孝經、史略、通鑑、古文真寶、唐宋八大家文、唐詩選、杜律、文章軌範、史記英選、擊蒙要訣、日語讀本、漢文讀本、世界讀本、新訂算術等。

○印を附せしが一般に廣く用ひらるゝもの。



## 第七編 朝鮮の文藝思想

## 一 朝鮮の藝術愛

## 朝鮮藝術衰亡の原因

## 第一、朝鮮藝術衰亡の原因

朝鮮の上代に在りては工藝美術著しく發達し、日本が之を模倣せしことも大分多く、今日現に保存せる工藝美術品中繪畫器物等にして朝鮮人の作に係るものなりと學者の推定するものや、或は其の藝術を模して製作せるものならむと鑑定さるゝものが中々數多く有る。而して之を我邦が隋唐と直接の交際を結ぶ以前を最とする。即ち其の以後に在りては日本への支那文物輸入は朝鮮を介せなかつた、けれども夫迄は概ね朝鮮の影響感化を受けし故今當時の佛の残つて居るのは何人も首肯する事實である。

右は三國時代又は新羅時代に於ける有様であるが、其後の高麗朝に至つても、美術工藝に一種の特色を發揮し陶器の如きは支那宋朝よりも優れて居るとの説は今日最も有力であるが、實際之を研究して見ると其の然るを知り得る。高麗朝の青磁は今日最も尊重せらるゝもので朝鮮も昔時斯かる美術を有せしことに想到すれば朝鮮の研究は深甚の興味ありと思ふ。但し高麗の佛像や梵鐘は新羅の夫に比し遙に遜

色あるを免れぬ。新羅時代は盛唐の藝術を其儘模寫することを努め、其の遺品を見れば殆んど盛唐の藝術に彷彿たるものがあり、優美且雄健である、所が高麗朝の藝術は唯寫生を維勉めし傾があつて一般に纖弱にして、徒らに線多く優美雄健の趣に乏しい。

其の佛像の如きも崇高の趣が無く藝術品としては慥かに劣つたものと云はねばならぬ。併し兎に角新羅から高麗朝迄藝術が隆盛を極めたのは何に原因するかと釋ねてみると、夫は實に佛教の影響である。此の時代は佛教が非常に勢力を有つて居た爲佛教に關する藝術が著しく進歩した。例へば國王躬ら寺院を建立するとか、大貴族が所々に寺院を建てるとか、佛像梵鐘其他佛具を造るとか云ふ譯にて、自然佛教美術が進歩發達を遂げ、之に連れて一般の美術も亦進んだ。此の新羅から高麗朝に至る迄隆盛を極めた朝鮮の工藝が李朝に及びて漸衰し、今日殆んど衰亡に瀕し、僅かに其の名を留め、或種の工藝に至りては、全く其の跡を絶つたのは、其の因果して奈邊に存するであろうか。自分の見る所ではそれは凡そ三原因に歸する様である。

## 一、佛教の排斥

李朝に至りては佛教排斥せられた爲、自然佛教美術も萎微不振の状態に陥り、また昔時の盛觀を見るべからざるに立至つた。即ち李朝の太祖李成桂は無學禪師を信任すること甚だ厚く、禪師も亦太祖を弼けた。後李成桂は釋王寺を建立した。此の状態は慶州に於ける新羅朝若くは開城並江華島に於ける高麗



朝の状態と全く趣を異にする。新羅朝及高麗朝に於ては王及王妃と云ふものが度々寺院に行つたもので、當時八關會なるものがあつて、始終寺院と往來し、寺院は宮殿に接近して宮殿と寺刹とは離るべからざる關係に在りて言はば政教一致の時代であつた、が李朝に至りては全く之と反對な政策を執つたわけである。

李朝は何故そんな政治の執方を爲たかと云ふに、李朝では前朝の高麗が滅亡したのは佛に佞した爲だと確信し、李朝の士君子大官連中には此の考が餘程深く染込んで居つたものと見えて、佛は飽迄も排斥して其の滅亡を圖らねばならぬとの思想が瀾蔓して居つた。我邦でも佛の勢力を有つて居た時代には佛教は朝廷と密接不離なる關係が結ばれたが朝鮮も亦同様である。高麗朝の亡びしは必ずしも夫に原因する譯では無いが、事情が左様であつたから、李朝が佛教排斥を企てるに至つたのであるが、そこで寺院も新たに興らず、佛像も新たに興らず、佛像も新たに鑄造せらるゝこと無く、佛敎美術は殆んど絶滅の姿に陥つた。元來宗教は人の精神に對する最大の勢力であるから、其の宗教が盛にして信仰熱すれば財物を投ずることも自然多い譯で、例へば奈良大佛の建造の如きは、當時の國力を以てすれば、今日の二萬噸以上の軍艦數百隻を一時に造る位の負擔であるが、之は實に國民の信仰の結晶である、所が李朝では佛敎排斥を企てし爲め信仰は衰へ隨て佛敎美術が萎靡不振の狀を呈し、一般美術も亦衰へて了つた。宗教藝術は他の藝術の基本となる事實は古今東西其の規を一にして居る。日本の藤原紀以前の佛敎藝術を取

つたならば殆んど藝術として見るべきものなく、夫等の諸藝術は實に佛敎藝術を基礎としたものである、

然るに李朝は之を無視せしを以て、藝術の滅亡したのは當然であると思ふ。

## 二、儒敎の輸入

第二の原因は儒敎の輸入である。李朝は大に儒敎就中朱子學を尊重したが、惜しい事には之を誤り讀んだのである。其の結果は王侯、士大夫には娛樂や趣味は有り得べきものでないと信じた。例へば書畫や古器物を弄ぶ如きは一種の罪惡……と云ふては少し語弊あれど、屑しとしなかつたのは事實であつて王侯士大夫は物を弄ぶことが出來ぬものと確信し、之を敢てする者は擯斥された。所が我々が藝術品と稱するものは人間の實生活に缺くべからざるものには無い。即ち衣食住に絶對必要なものは藝術品とも美術品とも云はない。そこで李朝の儒者は不必要品を賞翫することを避けたから、自ら藝術品や美術品は排斥されたのである。夫で士大夫の家に行つて見ると書畫とか、古器物とか花瓶とか云ふ美術工藝品は一點も無く、無趣味極まるものである。尤も内地と違ふて、朝鮮家屋には床間が無き爲、さういふ物を飾る適當な場所の無いのも原因を成すかは知らぬが、根本に於て之に對する趣味の缺如し居るのが最大原因であらねばならぬ。支那では同じく儒敎が國民の思想を感化陶冶したが、之を正解遵行した爲に李朝のやうな弊害を醸成すること無く、美術思想が充分に發露した跡を見ることが出来る。たとへば宋の朱熹は詩を賦し、山水に親み、古銅器を愛翫し、貴重にして容易に手に入らざる古銅器の模寫圖等を表



装して壁間に掲げて樂む等の趣味を解したものである。宋代に在りて考古圖、博古圖等が出来て居るが是等は實に美術の發展を反映するものである。或は天子自ら繪畫を描きて自然美術の獎勵と爲つた事や徽宗皇帝などは書院などを設けて頻りに繪畫を獎勵した。元に至りては時代は長からねど趙子昂などいふ書にも畫にも堪能な人物が輩出し、明に於ては天子自ら銅器の研究を爲し、乾隆帝は古今の豪傑であつたけれども工藝美術には非常に重きを於て、西情古鑑といふ大著述が出来た。陶器に付ては官窯を設けて之が製作を爲さしめたので非常に精巧なものが出来て居る。支那は儒教の國ではあるが藝術は能く發達した。之に反し李朝は之を誤り讀んだ結果全然其の趣を異にして居る。或る朝鮮人が其祖先の作りたる。畫幅を所藏しながら、己の祖先に畫筆を弄したる者あるを耻辱として、落款を削除したと云ふ奇談ある次第である。

### 三、制度の弊

制度の弊も亦工藝美術の發達を阻止したことは看過し得ざることである。其の最もよき例證は茲に一人の畫工があるとする。所で大官や勢力を有する者が數十百枚の繪を畫く事を命ずるが、何等の報酬なく總て無代で其の需に應せねばならなかつた。或は又何か珍奇な品物を所持して居ることを觀察使や大臣等が聞知すると、其の提供を迫るのであるが、之も無論唯取上げる。若し應せねば直ぐ獄に投せらるゝ始末であつた。こんな事は主として李朝の中世に盛んであつたのだが、自分が現に朝鮮人から聞いた

二つの話がある。之に依つて考へて見ても美術の衰亡せねばならぬことが解る。或地方の一百姓が大層能く實を結ぶ果樹を植え込んであつたが、間もなくその郡守に知れたので、郡守は果實を持參すべく命じたので、止むなく一簋献上したが、後更に残りを皆持來れと嚴命され、全部取上げられてしまつた。郡守は所々にそれを送つたものと見えて、其の翌年此所彼所から無數の要求に接し、その辯解に苦むことはたの見る目も氣の毒で、又もや全部取上げられた。そこで彼は斯かる苦しみ目に遇ふは畢竟此の樹があるが爲だといつて伐つて了つたとの事實である。もう一つ或る宣教師が朝鮮の一陶工と懇意になつたが、腕も利く様だし、陶土もよいのが出来るので、宣教師は本國から若干の釉薬を取寄せて陶工に與へ且言ふやう、私に此の薬を使ふて、コーヒー茶碗を造つて呉れと注文した。其の後暫くして陶工の許を訪れると立派なコーヒー茶碗が出来て居る。宣教師も驚きて是程巧みに出来やうとは思はなかつた、此の腕前ある以上は偉い金儲になる。自分も更に注文しやうが、廣く販賣するがよい。釉薬は幾何でも取寄せやうと喜んで別れた。それから數ヶ月を經過して陶工を訪ね、どうだ何か立派な物が出来たか、一つ見せて呉れといった所が陶工は頗る妙な顔をして、貴下は彼の薬を呉れて後を拵へよと言つて行かれたが實は釉薬は皆捨てゝ了つた。貴下に上げた様な器物を多く作れば私の家は忽ち亡び、且自分の生命が無い様になる。珍奇な物を造り出すと勢力家は數十百箇の無代提供を迫るので、若し夫が可能ぬと云へば牢に入れられる。牢に入れらるゝ時に私の家若くは親族の者が金を以て命乞をすればよいけれど



も、金無き故夫は駄目だから結局牢死せねばならぬことは火を賭るよりも明かであるから、貴下の親切に下さつた袖薬は皆捨てて了つたと告がたさうであるが、制度の弊も此所に至れば工藝美術も亡びざるを得ぬであらう。(朝彙大正四、八、小宮三保松)

## 二 文學、詩 歌

### (イ) 小 説

通俗文學は儒生、譯官、兩班、常人等、官吏と爲り又爲らんとする輩の知らざる所なり。漢文小説は一部の人には解する能はざると一部の人には蔑視せらるゝが故に宮人と上流社會の女子少年との間に行はるゝに過ぎず。之の有名なるは繪入本の三國誌、其他支那小説なり、謝氏南征記、九雲夢等も之に屬す。

諺文小説は多くは作者の名及び年代を缺き、支那小説を反譯し、模擬し或は創作す。而して支那朝鮮史上の已知の事實に關するあり或は一も史實に非ざる想像に本づくものあり、後者中には支那にありたる如き多くの陰謀策略に非ざるはなく、皆此國の祖先が朝鮮思想上に定著せしめたるものに非ざるはなし。且つ小説上の支那は毎に史實に合はざる時代外づれの事を以て充滿し、小説上の人物は絶えず朝鮮思想を一の虚飾なく表明するものなり。其共通性は、人の氣質の研究の如きは絶無なること、其人物は常

に同一にして學士と爲り又は少年武人と爲りて敵を擊攘するとか、容貌も道德も完全なる少女が戀慕するとか、其父が此等の少年少女の幸福に反對するとか、惡漢か少女を窘むるも其虚構誣告は發覺し其戰術に依り又は神通不可思議の學に依て幸福なる大官と爲るとか、其の型式は千遍一律なり。其陰謀策略も一律にして少年少女の婚を成さんとするとき又は久しく失踪せる子を認知するときに關するなり。其事變も亦た戰爭とか誘拐とか難船とか誣告陷害とか追放とか絶えず重疊繼續し來るなり。唯一の利益は如何にして此紛糾せる亂麻を脱せんかとの思想を喚起する好奇心を動かすあるのみ。(「朝鮮藝文誌」クラーン)

### (ロ) 歌 謠

俗歌は其性質上當然に鋭き感情を以て、或は感發的に、或は反語的に叙述上の眞個の才能を發揮するものなり。朝鮮のそれ等は戀愛及び其悅樂、醉中の樂時の経過し易きこと、一生の短きことは最も其の常套とする所なり。(「朝鮮藝文誌」クラーン)

## 三 美 感 と 好 尚

### (イ) 朝鮮の象徴裝飾

卍 これは萬の字の篆字である。此の形は歴史以前の石器時代から用ひられ、今日土中より發見される



遺物に多く見られる。朝鮮へは支那から輸入されたと思はれるが内地へも佛教文明と共に輸入され寺院に多く用ひられた爲め、内地人は此の形を見ると佛教的な感じを起し、地圖に寺院所在位置を示すに用ひたりなどする。朝鮮では建築物の壁面飾り、家具の金物、織物、敷物、簾などに盛んに用ひられる。この記は考古學者に Fylyfot, key, Swasteka, Sanvastika, Svasitka, Gammadion, 印度語に Svastika. アアリー語で Sotkika 又は Suvathika. チベット語に Iyung drung とか Gzagsang といい或は塞纏悉底迦、穢佛阿悉底迦、寶悉底迦ともかゝれる。朝鮮ではマンチャと稱し、支那では吉祥如意、印度では祝福、西方アールヤ民族では繁殖、富裕、健康などと、又佛教では手足吉祥徳相妙好具足と云ひ、兎に角目出度い印である。

**蝙蝠** これは幸福の福の字と蝠とが同音である爲め幸福を意味し、家具の引出金具、其他色々の織物身装具者に附せられる。

**鹿** これ又音祿なる爲め、幸福の印に多く用ひられる。其の爲めに神戸から朝鮮支那へ輸出する鱗寸のレットルにはよくこれを用ひる。尙靈妙にする爲めに翼を附し、羽鹿票などと稱する。

**柘榴** この果物は京城にはあまり見受けなが、南鮮地方にはあるもので、矢張り支那から來た形で柘榴は内部の實が多くの粒の集合で、従つて種子が多い爲め多子と云ふ意で、これ亦御目出度意味を有する。柘榴の中には皮が所々にあつて仕切りをなしそこに赤い粒が多くあるのである。

**桃** 此の模様も多く用ひれる一つであるが諸君も知られる通り桃は甘い汁の多いもので水蜜桃なんか特にさうで、此多汁と多壽とが同音である爲矢張り目出度いと云ふ意味に用ひれる。

**佛手柑** これは柑橘類の一種に掌の形をしたものがあるが、之を佛手柑と云ひ、少し握つた手の形をなす爲め福を握つた形と云ひ、少し慾の深い話であるが、兎に角、福を意味し以上三者を三多と云つて、財寶が多く子福者で長壽すると云ふ人生最も幸なりとの稱である。

尙此の他、白虎、青龍、玄龜、朱雀等の儀式用、貨幣に用ひられた鳳凰、家の入口に貼られる虎の繪等、限りがない。(大正一二、一一、一八、山形靜智)

#### (ロ) 美 感 好 尙

普校生徒から見た所に依ると、一般に圖書は下手で、美術と云ふものを好まない、自然美にあこがれると云ふことがない、けれども音楽は好むやうだと。

眼の美術的好尙は色彩よりも、線の動きを好み、調和色は混色複色よりも配色對色を好み、線の動きは直線式、對照式にして、曲緩式、均合式を重んぜず。

耳の美術的好尙は複音よりも單音を好み、長波形よりも短波形を好み、陽音よりも陰音を好む。(某)

#### (ハ) 娛 樂

韓人は多言にして奇を好む故に交際を以て消光するを樂み、相互の訪問及び快樂的集會洽く行はる。但



し婦人は決して是等の集會に臨むことなしと雖も、之に反して男子の富裕なる者及び官吏は多くは身閑なるを以て常に是等の集會を尋ねて、多く談し且相互に諸般の新事を交換して時間を過す。而して是等の集會は住宅の前方に在りて常に各人の爲めに開かれたる所の客室に於て行はれ、其集會者は多くは宮廷及び都府に於て起りたる珍聞、放談、貴顯大官の嚴勵なる言語の眞似、昔語りの評論及び學術文學に關する談話を以て時を送る。又平民は市街道路及び飲食店に集會し、其集る者僅二三人に過ぎざる時と雖も談話は直に交換せられ、分時も止む時なし、而して此輩の話題たるや歐人の觀念よりすれば甚だ不體裁なる事柄にして例せば姓名年齢住處職業及び最近の新事等なり。(韓國誌)

(ニ) 朝鮮煙管の長さ

佛國の學者ワットヰイルの研究に依れば、(煙管哲學)

「葉卷と紙卷は萬國一様であるが、煙管は之を用ゆる國民に依つて形狀大小長短を異にし、よく其國民性を現して居る。國民の活動力は其キセルの長さとは反比例をして居て、短きキセルを用ゆる國民は勤勉だが、長いものを用ゆる國民は怠惰である。しかも其怠惰の度合は其長さに準ずるのである。又勤儉なる國民の用ゆるキセルの雁首は少さく、浪費にして肉慾強き國民は雁首の大なるものを用ゆ」と。(京日大正元八、一五、無題録)

(ホ) 色 尙

韓人は凡て白色を尙び婦人の如き美の標準は殆んど白色と一致するの觀ありて此國に於ける「美麗」なる語は多少白色の觀念を含む。(韓國誌)



昭和二年三月二十七日 印刷  
昭和二年三月三十一日 發行

朝鮮總督府

京城府太平通二丁目一番地

印刷所 株式會社 大海堂



終